



水道部イメージキャラクター「シオンちゃん」

安全でおいしい水を供給して、100年

水道が普及する以前、塩竈は慢性的な水不足で困っていました。そんな状況を改善するため、さまざまな工夫と努力を積み重ね、宮城県で最初の近代水道が整備されるようになりました。

今月は、塩竈の水道の歴史と100周年記念式典についてご紹介します。

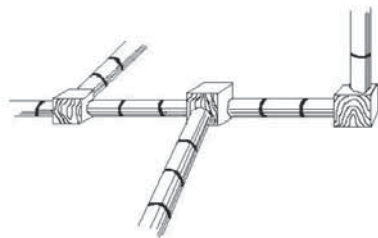
問 水道部総務課 ☎364-11415

はじめりは七清水

水道が普及するずっと昔。塩竈には、七清水と呼ばれる七つのわき水がありました。この水を人々は飲料や生活用水として使っていました。

竹の水道

しかし、人口が増えていくと七清水からわき出す水だけでは、とても足りなくなりました。そこで、江戸時代、肝いり（世話役）の鈴木勘右衛門が私財を投じて泉沢に堤を作り、赤坂橋近くでせき止め、竹の樋を渡して井戸から水を給水する仕組みを作りました。



▲江戸時代の水道は竹の樋をつないだものでした

近代水道

竹の水道は仙台藩内でも規模の大きなものでしたが、水源付近の開墾による水質の汚染や導水管への汚水の流入などで、明治時代には飲料水としては使えなくなっていました。井戸を掘っても地下水は少なく、水質も悪かったため飲料にできる水はほとんど出なかつたのです。そのため、七ヶ浜や多賀城から売りにきた水を買って飲んでいました。

当時、飲料水は高価で貴重なものでした。

明治43年に国の許可を得て、本格的な近代水道の工事が始まりました。県内初の近代水道です。水源は利府村の春日水源地で、そこから権現堂の浄水場まで導水管を布設し、さらに町内に配水しました。

安全で安定した水の供給を

人口の増加や産業の発展に伴い、拡張事業を行ってきました。浦戸に水道が通つたのは、昭和41年のことです。

水源も大倉ダムと七ヶ宿ダムの両方から受水することにより、安定した供給をすることができるようになりました。

昨年の東日本大震災では、導水管が破損したため、市内全域で断水し、給水車による給水が行われました。給水作業には、自衛隊や全国の自治体が応援にかけつけ、また、導水管の修理には、多くの事業所の協力をいただきました。

梅の宮浄水場では、水道水の放射能測定を月に4回行っています。現在、放射性ヨウ素とセシウムは検出されていません。

今後、安全な水を安定して供給するための努力は続きます。



▲春日水源地（利府町）

